

第41回京都府文化賞受賞者紹介

	氏名	受賞者紹介	
特別功労賞	うとお せい 烏頭尾 精	日本画家	「鳥の画家」として知られ、写実の領域を超えた、鋭くダイナミックに描かれた絵画作品を制作。二度にわたり、京都日本画家協会理事長を務めるとともに、創画会会員として京都画壇の振興にも大きく貢献。
	なかじま さだお 中島 貞夫	映画監督・脚本家	日本映画発祥の地である京都を中心に、日本の映画史に残る多くの作品を手掛けた。京都映画の屋台骨を支え、日本の映像文化の発展に大きく寄与した功績は、高く評価されている。
	ながた かずひろ 永田 和宏	細胞生物学者・歌人	熱ショックタンパク質「HSP47」を世界で初めて発見するとともに、小胞体における変性タンパク質の品質管理機構に関する新規遺伝子を次々と発見するなど、同分野の発展に大きく貢献。歌人としても、科学的な世界把握に基づく独自の作品は高く評価されている。
	やまぎわ じゅいち 山極 壽一	霊長類学・人類学者	長年にわたり、アフリカ各地で野生ゴリラの社会生態学的研究を行い、ゴリラ研究の第一人者として国内外で高く評価されている。ゴリラから得た知見をもとに、家族や社会、文化の在り方について積極的な発信を続けるなど、幅広く活躍。
	わしだ きよかず 鷺田 清一	哲学者	問題が発生している現場に向いて他者の声を聴く「臨床哲学」の提唱者として知られ、他者との間にあるものを論じるべく、身体、顔、衣服、言葉、ケア、労働、所有などの幅広い研究が国内外で高く評価されている。
功労賞	いしばし よしまさ 石橋 義正	映像作家・演出家	映像&パフォーマンスグループ「キュピキュピ」を主宰し、多くの短編映像を製作。京都市交響楽団とのコラボレーションなど、舞台やライブの構成・演出を数多く行うとともに、長編映画も手掛けるなど、多彩な活動が国内外で高く評価されている。
	えり としあき 江里 敏明	彫刻家	歴史的人物像の作品を京都府内をはじめ全国各地で数多く手掛ける。一方、技量を高め、感性を磨くために、公募展にも精力的に出展し、街角の風景や人物からインスピレーションを受けた躍動感のある作品は高く評価されている。
	かい ふさよし 甲斐 扶佐義	写真家	出町の喫茶店「ほんやら洞」で国内外の詩人や美術家、音楽家、文化人等、多様な人々の飾らない姿を撮影し続けた。青空写真展などの奇抜な企画と町の人々の生き生きとした写真が高く評価されている。
	くろだ しょうげん 黒田 正玄	千家十職竹細工・柄杓師	千家十職黒田家十四代当主。茶道具の基本となる形などを代々受け継ぎ、黒田家の技を伝承した作品づくりを中心としながら、時代にあわせ、自らの創意工夫を施した茶道具を制作。今までのあたりまえを軽やかに見直す姿と確かな仕事にますますの活躍が期待される。
	ささき くのすけ 佐々木 蔵之介	俳優	テレビドラマ、映画、舞台等多数の話題作に出演し、日本アカデミー賞優秀主演男優賞など数多くの賞を受賞。観る人を作品の世界感に引き込む、硬軟問わない幅広い演技力の高さと個性的な存在感が高く評価されている。
	しおた ちはる 塩田 千春	現代美術家	生と死という人間の根源的な問題に向き合い、「生きることは何か」「存在とは何か」を探求しつつ、かたちの無いものを表現したパフォーマンスやインスタレーションで知られ、世界中の人々の潜在意識を揺さぶり続ける作品は、国内外で高く評価されている。
	ひろかみ じゅんいち 広上 淳一	指揮者	国内外のオーケストラで指揮者として活躍。平成20年から京都市交響楽団第12代常任指揮者を務め、同楽団の能力・人気の向上に大きく貢献。東京音楽大学教授及び京都市立芸術大学客員教授として後進の育成にも尽力。
わかやぎ きちぞう 若柳 吉蔵	日本舞踊家	若柳流五世宗家家元。4歳で初舞台を踏み、10代で吉蔵を襲名。数多くの舞台上、繊細さと優美さを併せ持つ舞を披露し、高く評価されている。コロナ禍においても、伝統を守るために公演を企画するなど、日本舞踊の普及や後進の育成にも尽力。	
奨励賞	こんごう たつのり 金剛 龍謹	能楽師シテ方 剛流 若宗家	「舞金剛」と呼ばれる華麗で躍動感あふれる芸風を特徴とし、京都に拠点を置く金剛流の一層の発展を目指し、日々の稽古に励み、多くの舞台上で優れた舞を披露。次世代への能楽普及にも積極的に取り組むなど、今後一層の活躍が期待される。
	そのべ しんご 園部 晋吾	料理人	料理人として伝統を守りながらも時代に合った変化を加え、「山ばな平八茶屋」当代として精力的に活躍。京料理の登録無形文化財への登録にも重要な役割を果たすなど、今後も料理を通じた日本文化の発信に期待が寄せられる。
	むらやま はるな 村山 春菜	日本画家	力強い線描で都市の光景を表現した作品を制作。意志が及ばない線を描くため利き手ではない左手を使い、臨場感を出すために「現場」で写生することにより描かれる、日本画らしからぬ大胆な画風の作品が高く評価されている。
	よりた まみの 寄田 真見乃	尺八奏者	尺八独自の世界を表現する古伝曲の魅力を伝えるため、京都府北部など鹿や鶴の棲息地を訪れて森の中や崖の上でイメージを広げるなど、その卓越した表現力は「日本人の魂を感じる演奏」との賞賛が寄せられ、国内外で高く評価されている。
	らく きちざ えもん 樂 吉左衛門	陶芸家	千家十職樂家十六代当主。初代長次郎が千利休の佗茶の理想を体現したと言われる樂焼を創始して以来、450年の歴史を受け継ぎ、令和元年に襲名。「茶室空間の中での調和」を重んじ、新時代の樂茶碗に挑む存在として期待されている。